

## 発達障害児支援における 2 つの「社会化」

### ——保護者と教員の連携における困難に焦点をあてて——

企画者	日高優介（鹿児島大学高等教育研究開発センター）
司会者	日高優介
話題提供者	伊藤慎吾（個人研究者）
話題提供者	中嶋千絵（元三重県小中学校教諭・元小中学校介助員）
話題提供者	今村幸子（鹿児島女子短期大学児童教育学科）
話題提供者	桑原司（鹿児島大学法文学部）
KEY WORDS: 社会化 発達障害 認識	

#### 【企画趣旨】

教育における発達障害をめぐる状況として、2005 年に施行された発達障害者支援法がその起点となる。同法によりその定義が法的に導入され、学校現場においても同様の「発達障害」の概念が浸透し始めた。その後 2007 年に改正学校教育法等が施行されたことにより、発達障害児が特別支援教育の対象として法的に位置づけられ、以降学校は支援を必要とする児童・生徒に対して、その対応が求められている。

これらの児童生徒への対応について、文部科学省初等中等教育分科会（2012）による報告では学校と家庭が緊密に連携することが重要である、と示されている。

しかし、家庭（保護者）と学校（教員）の間でのトラブルは絶えない。すなわち、連携の重要性が指摘されつつも、それが困難な状況がある。ここには、保護者と教員の双方が要因となって連携が困難になっている、ということが想定される。

そこで本企画においては、連携の困難さについて、「社会化」という概念をめぐり、学校（教員）の観点、保護者の観点、そしてコミュニケーションの観点から議論を深めたい。

#### 【話題提供者】

##### 1. 発達障害児支援と「社会化」

伊藤は、教員と保護者への聞き取り調査に基づく分析から、双方に特別な支援をめぐる認識の隔たりがあることを明らかにした。この隔たりが、両者の連携を困難とする要因となっている。これらの要因について、中でも「社会化」「学校的社会化」という概念の観点から報告する。

##### 2. 学校（教員）の観点から

中嶋は教員が「どのような考えに基づいて特別な支援を行ってきたのか」、「その際に保護者との関係についてどのような難しさがあったのか」について実体験に基づき、報告する。

##### 3. 保護者の観点から

今村は発達障害のある子どもの保護者に対する支援への関わりにおいて、大人の捉える子どもの変化、その変化による子ども自身の姿の変容を確認した。上記観点から、大人の子供観や目標設定の柔軟な変化、その変化と子ども自身の姿の変容との関係について言及する。

##### 4. コミュニケーションの観点から

桑原はシンボリック相互作用論の観点から、人間間のコミュニケーション一般の成立困難性（成立不可能性）について仮説を提示し、その仮説に基づいて、上記状況における学校と保護者のコミュニケーションの成立困難性について考察を行う。

#### （文献）

文部科学省初等中等教育分科会, 2012, 「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」

(HIDAKA Yusuke, ITO Shingo, NAKAZIMA Chie, IMANURA Sachiko, KUWABARA Tsukasa)